認知症対応型通所介護の取組事例

□　やさしい手甲州事業所（単独型）

□　デイサービスセンター菜の花の里（併設型）

□　グループホームあかし（共用型）

＝認知症対応型通所介護＝

認知症対応型通所介護（認知症高齢者デイサービス）は、脳血管疾患、アルツハイマー病等により記憶機能等の認知機能が低下し日常生活に支障が生じている要介護者及び要支援者に対して、デイサービスセンター等において、入浴、排せつ、食事等の介護、機能訓練を提供するサービスです。

平成１８年４月の介護保険制度の改正により、地域密着型サービスに位置づけられ、従来の単独型及び併設型（１日の利用定員１２名以下）に加え、認知症高齢者グループホームの共用スペースを活用して行われる共用型（１日の利用定員３名以下）が創設されました。

利用者が住み慣れた地域で、地域住民との交流や地域活動への参加を図りつつ、利用者にとって自らの日常生活の場であると実感できるよう必要な支援が求められます。

認知症対応型通所介護の取組事例
（単独型）

事業所名	㈱やさしい手甲府 やさしい手　甲州事業所
所在地	甲州市勝沼町山１１１０－１
開設年月日	平成１７年４月１日
利用定員	１２人
職員数	１１人
事例調査日	平成２０年２月１２日

認知症高齢者デイサービス「やさしい手甲州事業所」は現在３１名の利用登録がある。生活圏域での利用が原則であるが、要望に応じて市と協議の上、近隣市町村からの受け入れも行っている。認知症専門のデイサービスとして、開所時から心を持って関わることに努めて３年、現在、利用者がその日を笑って楽しく過ごしてもらえるデイサービスを確立している。

利用者は、施設入所もいったんは考えながらも、通所サービスを利用しながら在宅介護で頑張っているケースが多数である。また、一般型のデイサービスでは孤立することが多く、こちらに移ってきた利用者もいる。開設以来、大きな医療処置のある人以外は、認知症が進んでいたり、様々な周辺症状（暴力や異食等）が現れている方も受け入れて来た。半日の利用からスタートするなど、どんなに困難なケースであっても逃れることなく、経験の少ない職員には体験を重ねることで力をつけてもらい、次のケースへの対応につながるようにしている。職員は、常に寄り添う心を持って関わることをケアの基本としており、過去の生活歴を把握した上で日々の言動の中から本人が求めていることを探し出している。そして、食事時、入浴時等あらゆる場面での声かけを丁寧に行い、否定することをせずに、本人の表情からも確認しつつ支援している。認知症高齢者は、感性が豊かで繊細である。人を見抜く力も鋭く、表面だけのサービス提供だけでは心からの笑顔は返ってこない。言動をよくみて常に利用者の立場で考える姿勢を基本とし、何がその人にとって安心で落ち着けるかを考え、関わりにつなげていくことを大切にしている。また全職員が同じ認識を持ち、同じ姿勢で利用者と関わることが大きな安心につながると考えている。利用者に心を持って関わることができるか、が第一の条件と確信している。

利用者本人を支えていくためには、利用者の家族と共にケアを考えていくことが大切だと考えている。普段本人と関わりの少ない家族は、認知症の症状が出ても実情が把握できないため、なかなか認めようとしない傾向がある。理解を得られないまま、本人に身近な嫁や娘あるいは息子等が一身に介護を担いながら孤軍奮闘して悩んでいるケースも少なくない。一方、デイサービスを利用することで介護者に時間的余裕が生まれたとしても、帰宅後に本人のリズムが乱れたり不安定な状態に陥ってしまい、さらなる負荷がかかってしまうこともある。こうした実態をふまえて自宅を定期的に訪問し、本人の自宅での様子を把握するとともに介護者の疲弊感をフォローしたり、ケアのポイントをアドバイスする等、共に支えるケアについて考える機会としている。

当該事業所の位置する場所は果樹農家地帯であり、特に繁忙期は在宅介護は困難となり、ショートステイを２～３ヶ月の長期にわたり利用する家族も多い。ショート

ステイは家族の介護負担の軽減には欠かせないが、このショートステイ利用により混乱やADL（日常生活動作）の低下を招くこともめずらしくない。本人と家族の立場になってケアプランをたてていくと月単位のショート利用は避け、週末はショートステイ・週中はデイサービス等、上手に分散させることが望ましいと考えている。

単独型の認知症デイサービスのデメリットとして、医師がいないため利用者の様態が急変した場合、看護師だけでは判断が困難で、時には１１９番救急にて対応をせざるを得ない。また、緊急時のケアマネジャーと連絡方法や主治医との連携についてもどのようにしていくか検討中である。一方、当該事業所では、訪問介護・居宅支援サービスも併せて行っているので、連携を取りながら利用者のニーズに柔軟に対応することができている。

現在、市の介護サービス事業者連絡協議会に加盟し、地域の福祉関係者や他事業所との連携を図り、サービス担当者会議では意見交換や情報連携に努めている。

今後の課題として、開所３年目となっており、サービスの内容も確立されてきているので、地域密着型サービス事業所として地域資源の活用を考え、関わりを深めていきたいと考えている。今までに季節は限られるが、お花見などドライブに出掛けたことはあるが、今後は可能な範囲で外食等も考慮中である。その他、地域の小・中学校生に訪問へのお誘い、教職員の実習生・介護専門学校生等の職場体験や実習の受入れ・地域ボランティアクラブ(踊り等)協力等、積極的に呼びかけることを考えており、その取り組みを検討中である。市の地域包括支援センターの依頼を受け、介護職の勉強会に講師として協力したことがある。今後も依頼があれば、積極的に応えていく考えを持っている。

事例の分析・評価

事業所の真摯な姿勢とその人をまるごと受け止め全人的なケアへの取り組みがうかがえる。認知症の人は、しばしば「問題」行動を起こす、という。介護者は、その人が「問題」行動（すなわちトラブル、混乱）を見せたとき、巧みに能率よく管理しようと考えがちだ。しかし、私たちにとって困難な行動や心配な行動を見せたとき、この人は何を言おうとしているのだろうか？発しているメッセージを理解し、満たされていないニーズに対応していくことが認知症ケアの重要な点である。それをこの事業所は、実践の中から見つけ出している。

また、デイサービスに居る時間だけ安定して過ごしてもらうのではなく、自宅でも安心して過ごせるよう家族の力の伸長に努めるとともに、本人と家族のこれまでの関係を踏まえつつ、よりよい関係が築いていけるよう調整していることも貴重な支援の一つである。

地域の理解を得ていくためには、お年寄りと一緒に地域に出かけていき認知症の人を知ってもらうことが大切である。一人ひとりのお年寄りの思いや願いを叶えていくには、事業所だけでできることには限界がある。お年寄りの思いや生活状態を家族や地域と共有し、みんなで一緒に支援していくことが不可欠だ。そのつなぎ役としての役割を担っていくことが期待される。

（分析・評価）
ＮＰＯ法人　地域生活サポートセンター

認知症対応型通所介護の取組事例（併設型）

事業所名	社会福祉法人　富士厚生会 デイサービスセンター菜の花の里
所在地	南巨摩郡南部町福士 2688-3
開設年月日	平成１４年１０月１日
利用定員	１２人
職員数	６人
事例調査日	平成２０年２月５日

「利用者の意志、人格を尊重し、家庭的な雰囲気のなかで地域や家庭との結びつきを重視しながら、自立への支援及び介護サービスを提供してまいります」という理念のもと、利用者一人ひとりが、その人らしく、今までのように住み慣れた地域で暮らし続けられるよう、支援を行っている。

利用者のこれまでの生活の継続性を重視しており、利用者の日々の状態のわずかな変化も見逃さず、心身の安定、安心に向けたきめ細やかな支援につなげている。また、本人の思いや意向の把握に努めるとともに家族からも利用者の生活歴や趣味を聞きながら、それらを日々の支援に反映させている。

家族との連携について、先ずは家族が職員に対して相談ごとなど、何でも話せるような雰囲気づくりに配慮している。利用前には自宅を訪れて家族と話し合い、本人や家族の希望の把握とともに、事業所への具体的な支援について理解を得るように努めている。そして、利用開始後の日常の様子等の情報連携については、連絡ノートを活用しているが、必要に応じてゆっくりと直接話し合う機会も少なくない。なお、事業所で実践している家庭でもできるケアサービスのワンポイントをアドバイスすることで、自宅でのトイレ誘導が容易になるなど、在宅介護の負担軽減化につなげるとともに、事業所での対応とギャップがなるべく無いように配慮している。

地域のケアマネジャーは、直接事業所に足を運んでくれることも多く、密接な情報連携が図られている。サービス利用開始後も利用者一人ひとりの適切な支援に向けて、状態変化についてはどうか、不明点は無いか等、相互に連絡を取り合い、利用者、家族のニーズに対応するサービスの提供について協働している。例えば、今までデイサービスに来ることを本人自身が拒否され、なかなか馴染めない利用者がおられた。事業所の職員は、認知症という病気から生ずる生活障害や現在の状況に至る本人の不安や葛藤を理解し、家族やケアマネジャー、職員等関係者が一つのチームとなり本人の思いを尊重したケアを徹底して行うことに努めた。そうすることで、デイサービスの利用につながり、本人自身に笑顔が戻って来た事例があり、チ

ームケアの大切を痛感している。

また、地域での本人の生活の拡充に向けて、地域のさまざまな公的・文化施設との交流、活用が図られている。周囲にある幼稚園、小中学校とは行事を通して交流の機会を持ち、歩いてすぐの場所にある近くの図書館では読み聞かせの会があり、利用者の活性化と同時になごみのスペースとなっている。さらに、毎年、町の文化祭には利用者の作品を提出するなど、地域資源の活用や社会参加についても積極的に行っている。

当該デイサービスは、特別養護老人ホームと併設されており、デイサービス自体は建物の２階に位置している。施設全体の広い敷地内をゆったりと散歩したり、併設施設との交流も頻回に行われ、地域の行事等を一緒に楽しむチャンスも数多く、大型施設の併設型であることのメリットを活かしている。

いざショートステイ利用を考えた時、利用者、家族にとって、日頃から馴染みのある場所に宿泊できることは大きな安心感をもたらしている。ショートステイの担当職員とデイサービス職員間での利用者の状態の的確な情報連携が共通したサービスの提供につながっている。さらに、デイサービスでは見られない夜間の状態をショートステイの職員の目を通して知ることができ、在宅サービスメニューの上手な活用等への選択が可能となっている。

開設６年目となり事業所の存在は地域に浸透しつつあるが、近隣住民との関わりに向けての事業所側からの働きかけについて、さらなる取り組みが必要と考えている。

事例の分析・評価

大規模施設（病院、老人保健施設、特別養護老人ホーム等）の併設型のデイサービスの場合、法人本体の基盤があるため、職員体制や緊急時対応、医療や事務手続き等さまざまな場面でバックアップ機能があり、これ等は利用者家族にとっても心強く、利用への大きな選択要素となっている。デメリットとして、同一法人内での完結性や閉鎖性が挙げられるとともに、本来、利用者が今まで過ごしてきた「町なか」での日常の暮らし方や過ごし方への乖離も挙げられてきた。

しかし、当該デイサービスでは、併設型としてのメリットを最大限に生かしながら、地域密着型サービスの究極である一人ひとりの今までの暮らしの継続性を重視し、個人のニーズに基づいたケアを実現するために、きめ細やかなケアマネジメントとチームケアを実践している。

認知症があっても自宅での暮らし続けることを可能にするためには、利用者本人の安定はもとより、家族自身の傷ついた心も労り、もう一度本人の穏やかな表情を蘇らせていくための協働が欠かせない。

今後、さらに一歩踏み出し、地域全体への地域密着型サービスの理解につながるアクションを検討していくことが望まれる。家族やケアマネジャーと一丸となって利用者を支えて来た経験は、これからの地域ケアの貴重なヒントとして活かされていくことであろう。地域ケア拠点のパイオニアとしての活躍が期待される。

（分析・評価）
ＮＰＯ法人　地域生活サポートセンター

認知症対応型通所介護の取組事例（共用型）

事業所名	社会福祉法人　日新会 認知症対応型通所介護事業所 グループホームあかし
所在地	甲府市上町２４７３
開設年月日	平成１８年４月１日
利用定員	３人
職員数	５人（グループホームと兼務）
事例調査日	平成２０年２月４日

「グループホームあかし」は、平成１５年４月にグループホームを開設し、その後、地域密着型サービスが創設された平成１８年４月に共用型の認知症高齢者デイサービス（以下、「認知症デイ）を開設した。

現在、認知症デイの利用者は３名おり、グループホームの入居者と一緒に居間や食堂等でデイサービスを利用している。

利用者３名のうち１人の利用者については、これまで独居であったため共同生活の場に馴染めるか不安な面もあったが、逆に大勢の人との共同生活が嬉しく、本人の心の安定にもつながっている。

ホームでは、利用者の状態把握をセンター方式（正式名称：認知症の人のためのケアマネジメントセンター方式）により把握し、それを踏まえて認知症対応型通所介護計画を作成し自立に向けた支援を心掛けている。例えば、以前に腕を骨折し動かなかった手のリハビリを根気よく続けた結果、入浴時の衣服の脱着や食事摂取が一人でできるようになったことや男性の利用者の過去の生活歴から、野菜を育てる事の能力に着目し、ホームの畑で野菜を栽培し収穫した野菜で食事の献立に用いることで、本人はもとより、利用者全員の喜びにつながっている。

認知症デイの一日の生活の流れは、朝９時に職員が３人をお迎えに行き、ホームでバイタルチェックを行い、その後は入居者と同じ生活を送っている。時には、入居者と一緒に、散歩や外食、ピクニックなどに出掛けることもある。また、利用者の朝の会話の中で、「寒かったよ」「雨が降っているよ」「暑かったよ」など、天気の様子や洋服など格好から季節の話題となり、グループホーム全体の会話も盛り上がり共用型としての効果も見られている。

また、利用者のお昼寝時に共用部分である畳ス

ペースが使われるが、入居者とのトラブルは見られない。逆に、認知症デイの利用者がいることで、人間関係にわだかまりがなくスムーズに行く傾向が見られることから、職員は認知症デイの利用者が増えたことによるメリットは大きいと感じている。

また、認知症デイの利用者が入居者に優しく接する場面も多く見られ、入居者にも仲間意識が芽生え、相互によい影響が表れている。日々お互いに接することで、グループホーム内の会話が増え、活動の範囲が広がっていく利用者の姿に、職員の支援にも自然とゆとりが生まれ介護の質の向上につながっている。

医療面では、ホームに週２回の医師の往診日が決まっており、突発的な病気の場合も往診や受診の支援体制は確保されている。

また、運営推進会議も２ヶ月に１回開催し、参加者には地域の中から、民生委員、自治会長、地域包括支援センターの担当者に参加していただき、認知症デイの様子を報告したり、地域との交流に役立つような情報提供もしてもらい、敬老会や道祖神祭りなどへ参加している。ホーム便りを組の回覧で回してもらい、認知症や事業所への理解を深めるような取り組みをするとともに、ボランティアの受け入れも積極的に行っている。

これからも生活の中に笑いが絶えない共用型を目指し、社会の一員として地域に溶け込んだその人らしい生活を支援していきたいと考えている。

事例の分析・評価

グループホーム、小規模多機能型居宅介護（宅老所）が未分化だった時代（９７年以前）には、グループホームも居住サービスだけに特化せず、デイサービス機能を持っていたところも少なくない。いずれのサービスも「認知症になっても自分らしく地域で暮らし続けること」にこだわり、利用者や家族のニーズに応えていくために自ずと多機能化してきた経緯がある。今般、グループホームにおいてもショートステイや共用型デイサービスが導入され、制度的にもより柔軟性が発揮され、地域連携や馴染みの関係づくりが強化されることとなった。

事例で挙げられているとおり、入居者にとっても地域の高齢者との関わりが刺激や潤滑として大きな効果をもたらしていることがうかがえる。また、デイサービス利用者にとっても馴染みの場や関係が築かれているため、入居する場合でも、環境変化等によるダメージが軽減される。

一方、共用型デイを実施することで、事業所は地域のサービス担当者会議へ参加することとなる。複雑化、複合化する利用者のニーズに対応するためには、他サービス事業者等との地域資源のより効率的なネットワーク化が求められており、当会議は、医療・福祉の地域連携の要でもある。事業所のメリットも大きい共用型デイの実践に、今後も期待が寄せられる。

（分析・評価）

ＮＰＯ法人　地域生活サポートセンター